

学校経営のポイント

見せたイチロー・松井・YGの“技と力”

若井 彌一

日本では、読売巨人軍が日本ハムを対戦成績4勝2敗で破り、また、アメリカでは、ニューヨークヤンキースが松井選手の大活躍で、対戦成績4勝2敗でフィリーズを破って優勝を決めた。また、チームとしての優勝はならなかったものの、マリナーズ所属のイチロー選手が、大リーグのなかでも特筆に値する記録を達成したシーズンでもあった。

それぞれに咲いた“工夫と努力”の花

プロ野球解説経歴のない筆者だが、今回は、日米プロ野球も全試合を終了したことであり、上記のような見出しで述べてみたい。

まず、イチロー選手である。彼は今年、9年連続200安打・MLB2000本安打を達成した。この選手が、MLB史上初の9年連続200本安打を達成した瞬間、観客は総立ちでこの記録達成を祝福した。打撃の「天才的センス」の持ち主と評する向きもあるが、非凡さもさることながら、工夫と努力、あるいは工夫のある努力の天才というほうが、より適切な表現かと思われる。筆者は、この選手が日本のプロ野球で活躍しているところから興味を抱いてきたが、やはり「工夫のある努力の天才」という表現がピッタリするように思っている。

松井選手は、今シーズンというよりも、ここ数年間はケガに泣かされてきた印象が強かった。今シーズンも、シーズン途中から去就がマスコミ報道の対象となるなど、精神的には相当に厳しい日々であったことは推測に難くない。しかし後半、とくに終盤での調子上昇がめざましく、フィリーズとの全米第1位を決めるシリーズでは、13打数8安打、打率6割1分5厘（史上第3位）、3本塁打、8打点という大活躍であった。大舞台で大きな成果を出すことができることが、大スターの重要な条件（力）であ

るが、松井選手はそのお手本のような活躍ぶりであった。この選手は、MLBに移籍していきなり満塁ホームランを打ち、鮮烈なスタートを切った。それにしても、非凡なものをもっていると改めて実感させられたこの決勝シリーズでの活躍であった。しかし、松井選手もイチロー選手に負けず劣らずひたむきに努力をする人であることは、よく知られている。

一時期、巨人が弱くて、プロ野球離れが進んでいくのではないかと野球関係者が不安を募らせたことがあった。しかし、今年の巨人は力強さを示して、日本シリーズを第1戦4：3、第3戦7：4、第5戦3：2、第6戦2：0で勝って、4勝2敗で優勝を決めた（参考までに、第2戦4：2、第4戦8：4で日本ハムの勝利）。

巨人の優勝もまぐれ勝ちではない

実力は近いのかもしれないが、これを巨人のまぐれ勝ちと思った人は多くないはずである。とくに第5戦3：2は、9回裏の2本塁打による逆転サヨナラ勝ちであったこともあり、巨人軍の底力をまざまざと見せつけた感じの試合であった。

これら3つの事例を掲げて、なにを言いたいのかということ、プロの世界で手抜きをして、多くの人々を感激させるような成果は残せないということである。当然のことであるが、ほどほどの努力はプロの世界では誰もが積んでいる。勝負運もないとは断言できないが、まぐれ運の連続で成果を出せる世界ではない。それは、プロスポーツの世界だけのことでない。このような工夫と努力の重要性については、学校教育においても、折にふれて児童・生徒等に具体例を示して説明し、生きる姿勢を考えさせ、実行力を身につけさせるようにしたいものである。

（わかい・やいち = 上越教育大学長）

●最新刊好評発売中！

浅野良一【編】 A5判 204頁・定価 2,415円 教育開発研究所

『学校におけるOJTの効果的な進め方』

『スーパー教職大学院発進！』 A5判280頁・定価 2,520円